

学校だより

翔空

No.19 平成23年 10月4日(火)
郡山市立喜久田中学校長 大堀 昌弘

「翔空」の由来 (校舎のシンボル)

壁画「空へ」を受け、風光明媚なこの学舎から、希望に燃え限りない空へ、力強く翔んでほしいという願いを込めて、翔空の碑ができた。

【何よりもほめること!】

良いところを見つけてほめる。なかなかできないことですが、「ワクワク子育て」(「家庭教育手帳」～文部科学省発行～)には、次のような説明が出ています。

「ダメなところを責めるより、良いところを増やしていこう」

子どもにとって大切なのは、自信と自分を大切にできる力です。それは、植物の根のようなもので、深く広く張るほど大きな実りをもたらします。表面的にとらわれることなく、その子が大きく育つことを信じて心に豊かな水や栄養を与えましょう。そして、その水や栄養となるのが、子どもの良いところを見だし、ほめることです。叱るべきときはきちんと叱り、ほめるべきときは、ちゃんとほめる。一つ叱ったら三つほめるぐらいのバランスを心がけましょう。ほめられることで子どもは喜びを感じ、自信や自尊心を育てていくのです。

「一つ叱ったら、三つほめる」このことを、私たちも日常生活の中で心がけたいものです。

今回は、【英語のことわざ】をお休みします。



秋はゆったりと絵画鑑賞

「夢を育てる職業」

～未来を担う子どもたちの行く末は?～

今日は、前回に引き続き、「夢を実現することの大切さ」についてお話をします。現在、東日本大震災の影響もあって、昨年以上の就職活動における大氷河期を迎えています。自分が就職したいと願っていた会社が津波とともになくなってしまったり、原発の影響で営業成績がよくないために新採用を見送る企業が多数あるからです。そんな中、前回紹介した書道家の武田双雲さんのように、人を楽しませたり、他人の幸福のために職業を選ぶというのは確かに少ないし、あまり現実的ではないかもしれません。しかし、夢を追い続けること、そしてその実現に向かって努力することの大切さはいつの時代であっても強く声に出して言いたいことの一つです。

ところで、皆さんがご存じのウルトラマンを育てたのは、須賀川市出身の円谷英二さんです。本放送当時の平均視聴率は36.8%、最高視聴率は42.8%(1967年3月26日放送の第37話。ビデオリサーチ調べ、関東地区)を記録した超人気番組だったそうです。今では考えられませんが、放送終了後もその人気は衰えることはなく、最初に行われた再放送でも平均視聴率が18%台を記録しました。前作『ウルトラQ』の実績を踏まえ、放映前にTBSは本作の商品化収入を74万円と見積もっていましたが、関連商品が大ヒットし、結果的に商品化収入は1億5000万円に膨れ上がりました。しかし、撮影当時、特撮にかなりの資金繰りをしなければならず、残念ながらその人気テレビ番組も9か月で終了となってしまったのです。(1966年(昭和41年)7月17日から1967年(昭和42年)4月9日の間)あとでいくつものシリーズを放映するほどになるのですが・・・。

夢を追いながら仕事ができる、こんなすばらしいことはありません。ともすると、損得勘定のみで先走って、子どもたちの将来に有益なものでさえ最初からあきらめ敬遠してしまう風潮があります。人間生きていくためには、当然経済的な保証がなければなりませんので、仕方がないといえばそれまでですが、喜久田中学校の子どもたちには、生涯をかけて打ちこめる仕事を将来ぜひ選んでほしいと願っています。(これが、私の理想とするキャリア教育です。)

今週から10月22日(土)に催される「翔空祭」の準備が本格的に始まりました。今年度は、3.11東日本大震災復興をめざして日々努力している私たち自身を励ます意味で、テーマもThe earthquake taught us "Face up".(地震が私たちに前を向いて歩くことを教えてくれた)と自分達自身を鼓舞するテーマとなりました。すでに3年生は9月中旬から、お昼休みに合唱の練習なども行っており、例年以上のすばらしい文化祭となることを期待しています。ぜひ子どもたちの発表を楽しみにお待ちください。